

感謝箱献金だより

ガラヤのほとり 35号

「宣教の主体としての女性たちの働き」



日本聖公会中部教区主教
アシジのフランシス
西原廉太

常日頃、日本聖公会婦人会のお働きには深い敬意と共に、感謝を申し上げます。とりわけ「感謝箱献金」にはいつも励まされています。2020年度も、中部教区の「NPO 法人ワンタイム」や「国際子ども学校 ELCC」などをご支援いただきました。「社会のしくみの中で生命や存在を危うくされている人々、とくに女性や子どもたちの自立をめざすための働きに献げる」という「感謝箱献金」の基本姿勢は、まさしく、私たち、主イエス・キリストに倣う者たちの群れとしての教会の宣教の原点に他なりません。

この日聖婦の宣教姿勢は、1892年以來、実に130年間に亘って変わることなく大切にされてこられてきたものです。例えば、敗戦後、活動を再開させた日本聖公会婦人補助会の関心の一つに「アイヌ伝道」がありました。しかも重要なことは、日聖婦にとって、アイヌの人々が単に支援の「対象」なのではなく、実際に「当事者」であった、という点です。『息吹きを受けて—聖公会婦人の戦後史』には、このような記述があります。「平取や有珠で、アイヌの女性信徒たちが教会の活動に力を入れていたことは言うまでもない。生活の支えは主に農業であるが、現金収入が余り得られない時は産物（小豆・馬鈴薯など）をさきげ物として持ち寄り、資金を作って、教区婦人会の集まりには必ず代表者を送っていた」（66頁）

私が個人的に、日聖婦の働きに感銘を受けたのは、1986年、私がまだ学生の時に、神戸の八代学院で開催された、日本聖公会第39（定期）総会を傍聴した際のことでした。同総会において、「女性司祭について考える委員会設置の件」（横浜教区聖職代議員・清家智光司祭ら提案）が提議され、その協議の中で、番外議員であった日聖婦・岡本千代子会長が実に感動的なメッセージをされたことを、今でも鮮明に記憶しています。従来は、日本聖公会の宣教の「支援」を自認していた「婦人補助会」時代を克服し、「補助」を削除して、教会女性たちが主体となって、積極的に宣教を担うのだという決意から必然的に導き出されたのが、＜宣教のため、そしてこれからの日本聖公会の進歩の発展に備え、女性の活動の活性化、なかならず、女性の教役者・女性の司祭の存在が必要である＞という結論であったのです。

それから12年後の1998年、日本聖公会で最初の女性への司祭按手が行われてから、すでに20年以上が経ち、現在の私たちの教会宣教に、女性の聖職の参与は不可欠なものとなりました。私はこの事実、確かに「聖霊の息吹」を感じるのです。

これからも、中心ではなく周縁に、力あるものではなく弱くされているところに、目を留めることの大切さを、私たちに気づかせてくださる尊いお働きを、心より期待しています。

東日本大震災から10年

釜石支援センター望 代表 海老原 祐治

10年という歳月は数字としてみればとても長く感じます。ただ実感としての10年はあっという間だった気もします。長かったような気もするし、あっという間だった気もする、これが私の10年の感想であり、被災者の方々も同じような印象をお持ちのようです。

大きな災害や事件・事故は人からあらゆるものを奪い去ります。家や財産、大切な人、その人が持っているその人らしさなどいろいろなものを奪います。そして時間に関する感覚も奪っていきます。よく被災者の方々は「あの日から時間が止まってしまった」と言います。街の復興は進み、震災の痕跡を見つけることが困難になる程でも心象風景としてはあの日のままで、目をつぶればそこは瓦礫が散乱する景色なのです。時は流れていき、生活に追われる日々の中でふと、何故私はここにいるのだろう、と違和感を覚えることがあるそうです。何十年かけて積み重ねた年月と地続きでない今があるそうです。そして何故それが断ち切られてしまったかに思いを馳せます。でもその何故がわかりません。私たち宗教者はそこに神様を持ち出し、神様への信頼に希望を見出すことができます。でも被災者の方々の多くは答えがわからずに悩んでいます。それはとても不安なことだと思います。

被災者は、あるいは被災地で生きることとは震災で負った痛手を忘れて癒したりするのではなく、痛手と共に生きることです。10年経ってもなお生々しい痛手と正面から向き合い、逃げないのが被災者です。尊敬に値します。だから私も逃げずに共にありたいと思います。

コロナ禍の中でサロンも中止が続いています。私たちのコミュニティ形成支援はいわば密を作ることであります。またサロン参加は社会参加の一つでもあります。高齢者にとって社会参加や外出機会の減少は深刻な問題です。心身の低下が顕著になります。現にコロナ禍になってから明らかに弱った方や、認知症の症状が出始めた方が少なくありません。コロナ禍はコミュニティ維持にも大きな影響を与えています。会えない時に何ができるかが大きな課題になっています。



上中島仮設「ちぎり絵作りを楽しむ会」



大町復興住宅1号棟「遠足」

どうか震災のことを、被災者のことを忘れないでください。忘れないことが、もしいつか皆さんが被災したときの希望につながると信じています。そして釜石支援センター望が皆さんと被災者をつなぐ役目をこれからも担っていきけるよう願っています。

国際子ども学校(ELCC)

名古屋学生青年センター 主任主事 谷景子

世界中の子どもたちが、コロナウイルスにより様々な影響を受けています。ELCC の子どもたちも例外ではありません。しかしながら、皆さまの暖かいお支えを頂きながら何とか子どもたちの学びの場を守ることができています。心から感謝申し上げます。

昨年2月の政府からの全国の小中高校に対する休校要請を受け、ELCCも5月末までの約3ヶ月間、休校致しました。この間は、子どもたちそれぞれに合ったドリルなどの教材を各家庭に届けに行き、子どもたちの生活や健康の様子を確認しました。また、日本語が十分でない保護者に、緊急事態宣言の深刻さを直接伝える良い機会にもなりました。

6月1日には休校要請が解除され、子どもたちの元気な声が学校に戻ってきました。再開後は、なお一層の感染予防対策を講じながらの毎日です。朝、子どもがスクールバスに乗車する際にマスクの着用を確認、検温をします。バスの座席は2~3人掛けシートに1人と限定し、降車後には車内を消毒します。これまで手洗いの習慣づけが難しかったのですが、今では登下校時、昼食前とトイレ後の手洗いが習慣になりました。教室では密にならないよう机や座席の配置を工夫し、昼食の前後には机を消毒しています。また、可能な限り窓やドアを開け、換気をしています。冬を迎え、加湿器も設置しました。一日の終わりには、人が触れたと思われるものは全て消毒します。



いろいろな行事は、子どもたちの楽しみを奪うに忍びなく、一つひとつ実施の可否を検討し、可能な範囲内で行っています。

1月14日、愛知県に再び緊急事態宣言が発令されましたが、休校要請は出ていないので、ELCCもそれに準じています。

3学期を迎え、在校生の多くが4月から地域の学校への入学・編入学を目指しており、とても大事な時期を過ごしています。子どもたちの学びと安心して過ごせる場所を奪ってはいけないとの思いのもと、できる限りの対策を講じて日々を過ごしています。

未だ終息の目途が立たない状況の中で、どのように子どもたちを守っていくのか、保護者や関係者と力を合わせながら最善を尽くしていく所存です。また、長期化が避けられないコロナ禍の中、人との距離を保つことやマスク着用の大切さ、手洗いや消毒の必要性を子どもたちに理解させることも、私たちの大事な務めだと考えています。

私たちはとても小さな群れですが、子どもたちのために変わらぬご支援とお祈りを賜りますようお願い申し上げます。



サイディア・フラハ

オンラインでつながった

10000キロ



鷲沢和子 コアスタッフ

去る12月19日(土)午後9時より、サイディア・フラハと感謝箱献金事務局(以下コア)による初のZoom交流会が行われました。今年1年、コロナ禍で世界中が自粛を余儀なくされ、もちろん報告会等も中止となりました。コアとお届け先が大切にしている顔の見える関係が閉ざされたままではと案じていたところ、サイディア・フラハの代表である荒川氏から申し出があり、この交流会が実現したのです。

コアの中で唯一、IT環境に強い日暮姉をホストに有志が数回の練習を重ね、当日の荒川氏との接続を待ちます。英語の堪能な山本姉が頼りです。サイディア・フラハには児童養護施設を中心に、0才から18歳までの子どもたちが集団生活を送っていますが、ケニアのロックダウン後、子どもたちの多くが親戚宅などに戻っているという話でした。進行はまず、荒川氏からサイディア・フラハの施設をゲートから順に案内していただき、その後、子どもたちを交えて交流を、ということに決まりました。一体何を話したらいいの?日本らしいことを紹介したいね、と各メンバーがそれぞれ考えてみましたが、初めての試みでもあり、あまり細かく決めないでやってみることにしました。



いよいよ日本は夜9時。ケニアは昼の3時。10000キロの距離をこえての会話が始まりました。子どもたちはクリスマスの祝会を終えたところだそうです。施設は広大な敷地の中で、ゲートから荒川さんの歩みにのっていろいろな建物がみえてきます。寮母さんたちが登場し、子どもたちがみえてきました。まずは子どもたちの歌とダンスです。クリスマスに合わせて練習していたのか息もぴったり。リズム感のいい楽しい歌声です。歌詞はぜんぜんわからないけど、ところどころにジーザスと聞き取れました。中には日本の歌もあり、数年前に訪れた日本の青年から教わったとのことでした。

数曲歌ってくれたあと、いよいよコミュニケーションタイムです。あいさつは「ジャンボ」がこんにちわ。日本からの自己紹介に「いつケニアに来てくれるの?」と人なつっこい笑顔がかえってきて、思わず「コロナが終息したら会いに行くよ」と答えてしまいました。たった今初めて会った気がしません。

子どもたちは市川のイルミネーションや小学生キャンプの映像に、顔を寄せて見入り、「きれい」「すごい」…たぶんそんな言葉をあげていたようです。



参加したスタッフ

「そこにはどんな動物がいるの?」と聞いてみたところ「犬や猫やネズミ」の答えが返ってきて、ぞうやキリンを想像していたコアメンバーは苦笑いでした。

子どもたちは得意な洋裁や絵を活かして、ステキなマスクをしています。前から感じていた色彩感覚のすばらしさや個性が暮らしの中にもあふれていて、同じ降臨節のときをこんな風に過ごしているのだな、とうらやましくなりました。



ケニアからの画像は不鮮明残念！！



自分たちで作ったカラフルなマスク



田舎の小学校から 6500 枚の注文を受け 大量生産中！
懐かしいミシン Facebook から

コンパクトに収録した動画をアップしますので、ぜひ一度ご覧ください。

コロナ自粛はもう少し続きます。何もできない、じゃなくて何かできることを探してやってみる、それがうまくいってもいなくても何か希望につながるんだと実感できたひとときでもありました。サイディア・フラハの皆さま、そして読者の皆さま、また会える日を楽しみにしています

交流の動画は婦人会ホームページからご覧いただけます **日本聖公会婦人会で検索**

スマートホンの QR コード読み取りアプリでも
ご覧いただけます



<http://www.nskk.org/fujinkai>



お献げ先 **アルディナウペポ** の活動報告書にステキな写真が添付されてきました。



マスクのマークが折り鶴だ？！

テオノコの創設者である吉田千鶴さんのお名前の由来は千羽鶴...ウガンダの国鳥が カンムリヅルだったこともあり、鶴のマークを付けたそうです
吉田愛一郎氏より伺いました



ウガンダの国旗



カンムリヅル

今、テオノコ(アルディナウペポの職業訓練施設)はテラルネッサンスという NGO から出向していただいている小川慎吾さんという青年の絶大な協力で運営されているそうです。
写真も小川さん撮影との事

訃報



サイディアフラハ園長 ピーター・カルリ氏

11月29日に糖尿病が重くなってナイロビにある病院に入院したカルリ園長は、検査を受けてコロナ感染していることが判明。

12月10日の未明にその病院で亡くなりました。カルリ氏は1992年のプロジェクト立ち上げからプロジェクトに関わり、荒川氏やデニス氏との共同代表で運営にたずさわり、ケニアサイドでの活動ではプロジェクトリーダーとして活動を熱心に切り盛りしていました。

そして2度日本に来て、日本の支援者の方たちと親交を温めていました。

「聖地ろうあ子どもの里」元施設長 ブラザーアンドリュー・デ・カーペンティエ氏

昨年10月1日に不慮の事故で亡くなりました。1977年から2017年11月までの40年間にわたり、施設長を務め、悪化していた財政を立て直し、「聖地ろうあ子どもの里」中興の祖といわれた

オランダ出身の71歳施設長を定年退職した後も「聖地ろうあ子どもの里」のあるサルト市にとどまり、英国統治時代の古い建築物の保存と修理事業に携わっておられました。



†お二方のお働きに感謝します。天国で安らかに憩われますよう、心よりお祈り申し上げます

感謝箱献金事務局 チャブレンから

司祭 エレミヤ・パウロ 木村直樹（大宮聖愛教会）

新型コロナウイルス感染症の終息が見えません。そのことは、わたしたちを不安にさせます。しかしワクチンが開発され、日本でも近く接種が始まる予定です。少しでも希望が見えてきたと思います。さて感謝箱献金は、世界の片隅で生きている人びとに関心を寄せ、その人びとへの支援に献げられて来ました。新型コロナウイルスは、豊かな国に住む人や貧しい国に住む人を区別しません。しかし豊かな国の人、貧しい国の人より早くワクチン接種が受けられることでしょう。コロナ禍による日本の医療崩壊が叫ばれていますが、貧しい国の人はいくらでも十分な医療を受けられる体制の中で生きていないのです。日本の医療の充実を求めますが、十分な医療を受けられない人びとが世界中にいることにも心を向けたいと思います。わたしたちの働きは、小さなものではありませんが、そのような人びとを覚え、祈ることから始まったのです。



神さまにとって、すべての命が大切なのです。

教区婦人会からの声

主の平和がありますように。

二〇二〇年は今まで当たり前だったことが当たり前にできなくなる年になりました。私たちはそのような中で何ができるのかを問われ、様々な新しい試みをしてきました。日聖婦においては第二六(定期)総会后第一回会長会が初めてオンラインで開催されました。

その会長会において「国際子ども学校」と「NPO法人ワンダタイム(海外医療協力部門)」の働きのために感謝箱献金の活用を議決していただきました。愛知県名古屋市において活動している「国際子ども学校」は在日フィリピン人の子どものために一九九八年に設立され、「NPO法人ワンダタイム」は長野県小布施町の新生病院で長年行われていた活動を基に二〇一六年に設立されました。

日聖婦が長年取り組んでいる感謝箱献金は、お金と献金をした方々のお祈りの両方が活動を支援する力になっています。ご支援に感謝します。

教会における「婦人会」や「女性の会」の活動については様々な考え方があり、そのような活動を行わない教会もあります。中部教区においても、愛知・岐阜・長野・新潟の四県にある二五教会と一伝道所のうち、「婦人会」として活動するのは四教会のみです。個人会員として婦人会活動をする方がいる教会もありますが、教区の中において決して大きな組織とはいえません。そのような中、教区で二件も感謝箱献金からの支援をしていたいただきます。中部教区婦人会の働きを大きい小さいで計るのではなく、神様のお導きのうちに豊かな働きになるように心がけていかなければと思います。感謝箱献金、被献日献金、リーストコインなどの取り組みを、婦人会の組織のあるなしに関わらず多くの教会の信徒、教役者で取り組めるように働きかけていきたいと思えます。

中部教区婦人会 前会長 長井登茂子

主にありて

感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。

イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩られました。

私たちにもそのイエスさまの歩みに倣(なら)う心をお与えください。

私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。

また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。

主イエス・キリストのみ名によって アーメン

感謝箱とわたし

聖職候補生 ウィリアムス神学館 2年

ダビデ 佐藤 充



プロフィール

出身：神奈川県横須賀市

出身教会：熊本聖三一教会

(洗礼：横浜聖アンデレ教会、堅信：逗子聖ペテロ教会)

経歴：長年介護関係の仕事に携わってきました。28歳の時に沖縄へ移住し、14年ほど暮らしました。

移住する前はあまり教会に行っていませんでしたが、沖縄で様々な方との出会い、ペンテコステ系教派の教会へ毎週通うようになりました。その後、聖公会で聖職を目指す召しを受け、祈っていたところ九州教区へと導かれました。

趣味：海や川へ行く、カフェ巡り、三線を弾く

日頃、神学生を覚えてお祈り下さり、また様々な形でご支援を賜りありがとうございます。

私が中学生の頃、横浜教区の奉仕活動の一環で、高齢者施設であるベタニアホームへ伺ったことがあります。ベタニアホームが、感謝箱献金によって支えられた歴史があったことを知り、感謝箱献金は大切な役割を担ってこられたのだと感じました。また『感謝箱献金だより』を通して、感謝箱献金が様々な国や団体をサポートされているのを知りました。その活動は日本国内だけでなく、米国聖公会から広がっているもので、長い歴史があると知り、とても感動しました。その尊いお働きが長年続いてきたことには、様々な方の献身的なご奉仕と、主のお導きとお守りがあったからだと拝察いたします。

私達神学生は、日曜日ごとに、教会で実習をさせて頂いております。その際、実習で何を学ばせて頂いたか振り返り、実習記録を書きます。ウィリアムス神学館では、1988年ランベス会議でまとめられた『宣教の5指標』に基づいて省察するようになっていきます。5指標の中に『3、愛の奉仕によって人々の必要に応答すること』という文言があります。各教会で、これまで様々な奉仕活動が行われてきたと思います。しかし、昨今のコロナ禍において、多くの活動が制限されていることでしょう。感謝箱献金はそんな中でも、経済的な支援を通して愛を表すことが出来る、貴重な活動だと思います。今後も感謝箱献金のお働きが、主の導きの中でさらに祝福され、用いられると信じております。そして私も、この活動に微力ながら参加させて頂き、奉仕する恵みに与って参りたいと思います。

編集後記

「ガリラヤのほitori」35号をお届けいたします。

原稿をお寄せ下さいました皆さまには感謝申し上げます。

世界中でCOVID-19感染が拡大し、困難な生活が続いております。その中であって東日本大震災から10年をむかえます。震災直後から被災地で支援を続けてこられた「釜石支援センター 望」の海老原氏にご報告をいただきました。被災者の皆さまには、この10年も、これから先も震災と向き合って過ごしておられます。この事を絶えず心に留めておきたいと思っております。

COVID-19感染拡大がなかなか収まりません。皆さま、お気を付けてお過ごし下さい。 永井眞由美



日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局
〒297-0032

千葉県茂原市東茂原 10-192

永井方

電話/FAX 0475-24-6915

E-mail kansyabako@gmail.com